

西小は 大きな 家族

# Family

～校長のたわいもない独り言～

平成 31 年 3 月 20 日 (水) No.59

発行人

144 回目の卒業式。伝統を感じる  
なあ～の川崎先生。

## ■卒業おめでとう・・・1年を振り返ってみました■

西小学校に来てから最初に驚かされたのは 6 年生の歓迎の言葉だった。はっきりとしっかりと、原稿をすべて記憶し、すべての動きがキリリとしていた。この瞬間から、6 年生の素晴らしさを目の当たりにすることになった。

まずはあいさつ。いつでもどこでも誰とでも。グラウンドだろうが廊下だろうが、2 回でも 3 回でもすれ違った数だけあいさつが返ってくる。もちろん先生だろうが保護者だろうが、知っていようが知るまいが、あいさつは響く。

そして始まる朝の掃除。早く来たものからほうきを持ち出し、無言で掃き始める。そして次々とそれに続く。6 年生が先陣を切って見本を示し、下級生に伝わっていく。これこそが伝統。

バレーボール大会の練習は教員チームと練習試合。もちろん得意な者もいれば苦手な者もいる。ここで見られた支え合い。持ちつ持たれつ、お互い様の精神。決して失敗を責めずにドンマイの声が響く。こんな関係性があれば思い切り良くプレイできる。だから優勝。チームワークの勝利。次の日にも「大会を応援してくれてありがとうございました」とお礼が言える 6 年生。心が育っている証拠。勝利は必然だった。しかし保護者のみなさんも熱心。大応援団が会場にかけつける。仕事は二の次さんの次。

伊奈ヶ湖リニューアルオープン式。「あいさつは学校は練習、外が本番」という倉崎先生が心を教える。それを見事に実現する 6 年生。県内各地から見えられたお客様に、西小の爽やかさが伝わった瞬間。そして良き噂は県内に広まっていく。

児童総会には“ぎゃふん”となった。6 年生が大人に見えた。本部役員の見事な運営や答弁。議長の落ち着いた的確な指示。書記のていねいな字と完璧なまとめ。どれをとっても小学生のレベルを超えている。初めから終わりまで感心しっぱなし。

掃除を終えて帰ってくる川崎に「ありがとうございます」と最初に言ってくれたのはもちろん 6 年生だった。自分の学校の意識と感謝の気持ちの現れ。うれしい。

西地区を一緒に巡る。川崎の家の前を通る。“つけえば”を説明する。地域を一緒に巡って普段気づかないことを知る。こんな貴重な経験と時間を一緒に過ごせたことがこの上なくうれしい。そしてこのことをレポートのテーマにしてくれたこと、もちろん最高にハッピー。

書ききれない・・・音楽集会、西地区有名計画、運動会、修学旅行、陸上記録会・・・その他もろもろ。毎日の中に日常的に心温まる瞬間があって、その全てと言っていいくらい 6 年生の姿は全校に広まっている。それだけ 6 年生は学校の顔だった。

そんな 6 年生と 1 年間をととても深く過ごせたことがなによりの喜びだった。西小は大きな家族と 100 回言うよりも、6 年生の姿を見れば一発でわかる。なんて素晴らしい日々を過ごせたのだろう。多くの喜びを与えてくれた 6 年生に心から感謝。

「さよならは別れの言葉じゃなくて、再び会うまでの遠い約束～♪」。また会おうね。いや、きっとすぐに会うよ。それまでバイバイ(^\_^)〽

●毎朝、子どもたちに付き添ってくるお母さんが、「あと二日。なんか寂しい」と言う。ずっと続けてきたものが、ゼロになる。その寂しさは半端ない。登校ボランティアお待ちしております。